

上演 6

2024年8月1日 1校目
九州ブロック

宮崎県立宮崎南高校

『学校の片隅で、数式を叫ぶ』

第48回全国高等学校総合文化祭
第70回全国高等学校演劇大会

講評文

生徒講評委員会 担当委員

岐阜県立岐阜高等学校

横山綾那

先生や生徒たちの軽快なやりとりや長野先生のキレのあるダンスといったギャップで会場が笑いや拍手に包まれ、心温まる劇だった。

演劇部の女子3人が数学の補講を受けるために集められた。大会出場のための公欠を取るため、男の子とイルミネーションを見るため、好きなゲームをするために彼女たちは補習合格を目指す。そこに現れた先生は、「眠りの長野」の異名を持つ数学教師。初めは声が小さく、姿勢も丸く、頼りない先生を変えようと彼女たちは奮闘していく。先生は生徒達が作ってくれた授業の脚本を元に練習を重ねるうちにだんだんと変化が見え始める。そんな先生の姿に舞台の上だけでなく見ている私達も一緒に応援する気持ちになり会場に一体感が生まれていた。

普通、先生と生徒は教える側と教えてもらう側で対等ではないけれど、この劇では一緒に発声練習をしたりダンスを通して、生徒が先生を助けている。また、先生に自分たちの姿を重ね、彼女たちも影響を受けて頑張ろうとしていたのではないだろうか。だからこそ、三角比の相互関係の公式もままならない状態から、数学を遅くまで勉強していくまでに成長したのだと思う。そして、数式を叫ぶ事によって長野先生を肯定し、励ましていた。これは、お互いの頑張りを知ったからこそ信頼関係が生まれたのだろう。

演出では、初め先生の声が客席にいても本当に聞こえなかった。だからこそ、舞台上にいる役者だけでなく、観客も耳を傾けて先生を見守り続けることができたのだろう。また、最後に照明が落ちて夕方になっていったが、先生と長い時間を過ぎてきた事や放課後の特別感が表されていたように感じた。幕が降りる時に流れた歌詞の中に「かさぶたがあるなら消えてくれ」や「勇気」という言葉が入っており、先生の時間が動き出したのが伝わった。

この劇を通して自分自身も励まされ、エールをもらえた気がした。お互いに影響を与え合い明るい変化を遂げて行く姿に心を動かされた。

